
IS バカヤロウがかくちょーだぶん

ウィリアム一世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS バカヤロウがかくちょーだぶん

【Nコード】

N5111T

【作者名】

ウィリアム一世

【あらすじ】

国語の成績3のバカヤロウが頑張って書いてみる初の痛々しい二次創作（笑）

一話

それは、白騎士事件後 篠ノ之 束がインフィニット・ストラトス、通称「IS」を世界中に発表してから数ヶ月……。世界中がISに集中していた。そしてとある国のとある研究所でISの起動実験は最終段階に入りつつあった。

エネルギー回路や各部の負荷など、データ上では問題なくあとは搭乗者が乗り込むだけであった。

ここ、とある国では他国よりもほんのすこしだけはやく、この段階までこぎ着けていた。そして今日、ようやく実験は最後の行程を迎える。

「さあ○○君、触れてみたまえ。」

端からみればかなり怪しい、メガネをかけた白衣の男が少女……にも見える少年に言った。

「……はい。」

答えるのはとある国の中でも特にISの適性があると思われる少年であった。彼はなんとも言えない微妙な表情を浮かつつ、ISへと近づいた。

「これが……、IS。」

遠巻きに見ることはあったが、間近で見るのはこれが初めてであった。彼は複雑な心境だった。

ISが各国へと配られたあと、この国ではISとのデータ上での適性テストが行われた。

これはこの国の全ての十二〜十八歳の子供を対象に試行された。対象の子供達の親は我先にと適性テストを受けに行ったが、彼の家は貧しく、両親は働かずに博打ばかりやっており、彼がバイトで生活費を稼いでいた。

適性テストは国が試行するので無料であり義務となっていたが彼はバイトで忙しく、あまり興味もなかったため、適性テストを受けには行かなかった。

しかし、適性テスト期間が終了した三日後。彼の家に黒服の男が二人やってきた。そこで彼は適性テストを受けさせられた。彼としては興味もなく、はやく帰って欲しかったためすんなり進んだ。

結果は直ぐにでた。なんと（AA）であった。彼はピントこず、呆けていたが、黒服の男達は何かを話し合ったあと、一人は彼に説明を、もう一人は彼の両親と話を始めた。

彼がISのことについて大まかに説明を受けている最中、もう一人の黒服の男は何処かに電話をしていた。説明が終了したあと、彼は選択肢をあたえられた。ISの訓練生になるか、ならないか、彼は悩んだ。自分がいなくなれば自分の両親はどうやって生活して

いくのだろうか、誰が生活費を稼ぎ掃除選択をし、料理をするのか。あまりいい思い出はないが、別に嫌いでもなかった。ましてや、親である。

しかし、彼の運命はもう……決まっていた。

唐突にドアが開いて、もう一人の黒服の男がアタッシュケースを両手に現れた。男は彼の両親の前にいくと、――それ――を置きこちらの方を向き、頷いた。

次の瞬間、強い力で腕を掴まれ引っ張られた。

「った……、おい！！なにをするんだ！？」

少年は男を睨むが、男は気にも留めずに一言。

「いっ。」

と言って引っ張っていく。

「おい！！はなせよっ！！……やめろ！」

彼は必死で抵抗するが、男のほうが力が強かった。

「……っ。と、父さん！！母さん！！」

思わず助けを求めるが、両親はこちらをむかず、アタッシュケースを開けた。

そこに入っていたのは、金、
その時彼は悟った。

（自分は金で売られた）のだと。

これが適性ランクB～D程度なら話しはまだ違っただろう。しかし彼のランクはAA。これは、この国では破格であった。Aランクは一人いたが、あとはC～Eランク、Bが小数というのが現状であり、AAランクというのは喉から手が出るほど欲しい人材であった。

彼が扉が閉まる直前に見たのは、金、金を手に喜ぶ、両親の姿だった。

いろいろな気持ちを胸に……彼は、ISに……触れた。

二話

——シー——。

何もおこらない。別段、特に感じることはないし、ISにも変化はない。

「……？」

この数ヶ月で学んだことに基づくならば、適性をもつ者が触ればISは、起動ないし反応するはずである。

「……、○○君どうしたんだ？はやく起動してくれたまえ。」

白衣の男が怪訝そうな顔をして尋ねてくるが、

「いえ……、それが、起動しないんです。」

「なんだって？……。ふむ、どこか接触でも悪いのか？おいキミ、ちよつと調べて見てくれ。」

白衣の男がそう言うとならにいた助手と思われる女性が——はい。と言いつつISに触れると、「「！？」」

キンツと金属音が辺りに響き渡った。

「……別にどこもおかしくはないようだ、驚くべきは彼女にも適性があった……ということか。」

——ではなぜさつきは……ブツブツ。

男がなにか呟いていたが彼は聞いてはいなかった。なぜ適性リンクAの自分が触れても反応しなかったのに、この女性ひとが触れたら反応したのか？思考の波に没頭していると、「ふむ、〇〇君もう一度触れてみてくれたまえ。」

「……はい。」

彼はもう一度ISに触れるがやはり、ISの反応はない。

「……もう一度調べる必要があるな。」

「あ、あの「〇〇君、君はもう下がりました。」……はい。」

そういわれてしまえば、彼はもうそこを退出するしかなかった。後ろからは白衣の男の声が忙しく響いていた。

彼は、与えられた部屋のベッドによこになっていた。どうやって戻ってきたのかは覚えていなかった。どうやら思った以上にシヨックだったらしい。そうして横になっていると、おもい出されるのはやはり、先ほどの事と、ここに来て受けた訓練の事ばかりである。

それは辛いものばかりであったが、嫌ではなかった。

まず、日本語を覚えさせられた。なんでもISの開発者である篠ノ乃 東が日本語でしか話さず、ISの説明なども日本語であるため、日本語が世界的に広まったとか。まだ数ヶ月しかたっていないが、今ではISに携わる者は全て日本語を習得しているらしい。

しかし、マンガやアニメなどの日本のサブカルチャーをつかっての学習とはいえ、二週間でマスターしろ、というのはどうかと思う。まあ、日本のサブカルチャーは素晴らしいものだったのだが……。

そしてそれと並行してもちろん、軍としての訓練もうけた。適性の高い同年代と思われる少年少女たちが集団で受けるのだから、自分ばかりがった。

適性のためか、自分は個別指導であった。そのためか、嫉妬や妬みなどの目でみられ、友人と呼べる人はいなかった。

毎日、精根尽き果てるまで訓練を受け、夜はISと日本語の勉強。正直、辛かった。しかし自分には拒否は許されていない。なぜなら自分はすでに研究所ないし国の所有物だったからだ。

ふと先ほどのことを思いだし、この数ヶ月はなんだったのだろうか、と考える。ISを動かせないなら自分は何故ここにいるのか、これから自分はどうなるのか。

———また、捨てられるんじゃないか？

そんな言葉が浮かんできたが、彼は頭をふってその考えをうち
けした。

「……そういえば訓練生には女性が多かったな。」
などと考えながら、おもむろに備え付けのテレビをつける。適
当にチャンネルを回していると、———緊急ニュースが入りま
した。

そんな言葉がなぜか耳に残った。普段ならきにも留めないよう
なものなのに、何故か異様にそれがきになった。

続けて、———インフィニット・ストラトス通称ISには
致命的な欠陥があり女性以外には、反応しない。とのこと。――

「……えっ？」

アナウンサーが続けて何か言っているが耳に入ってこない。

———
どれくらい時間がたっただろうか。数時間はたったようにかん
じた。しかし時計を見ても、どういうわけか針はあまり動いていな
かった。

ふと部屋の外から研究者たちの声がきこえてきた。先ほどの言葉が脳裏をよぎった。

———また、捨てられるんじゃないか？

瞬間、彼はたまらず走り出し部屋をとびだした。途中で彼を呼び止める声が響いたが彼はふりかえらず、逃げるように研究所を飛び出した。

外は……、雨がふっていた。

三話（前書き）

基本、設定無視のごーまいうえいです。

三話

どれくらい走っただろうか……。どれくらい時間がたち、ここがどこなのか。自分にはわからなかった。途中で人にぶつかったり転んだりしたようなきがしたが、よく覚えていなかった。……なぜか空がみえる。ああ、自分は今、倒れているのか。

まわりに人はいないようだ。彼は泥だらけで、髪も元の色がわからないくらい汚れていた。

——雨はまだふりつづいている。

「……もう、いいや。」

彼はそう呟き目を閉じた。

——ふと人の気配を感じたのか彼は目をあける。瞬間彼は自分の目を疑った。

「……ウサミミ？」

そこには、ウサミミをはやしたヒラヒラの服をきている女性があったっていて自分を見下ろしている。

視線が交差した。数秒見つめあったのち、彼はなぜかものすごい睡魔に襲われた。

あれ、なんで……こんなに、眠いんだ……ろう。

彼は意識を手放した。

彼を眠らせた張本人、篠ノ之 束はそれから数秒間彼を見つめていたが、どこからともなく大きな機械を取り出して、彼とともにその場をたちさった。

——雨はもう、降ってはいなかった。

————「知らない、天井だ。」

目を覚ますと、知らない部屋のベッドにいた。ここはどこだろうか、周りを見渡すがどうみても病院ないし、そのたぐいの施設ではない。周りには機械が散乱していて、しいて言うならそう……物置

にスペースをあけ、ベッドとテーブルを置いた、といったほうが分かりやすいだろう。

「どこかの……研究所？」

つい口からそんな言葉がこぼれた。すると、

「そうだよ。」

ふりかえって見てみると意識を手放す直前に見た、ウサミミの女性がいた。

「ハロハローっ目が覚めたみたいだねっ。」

「あなたは？」

「私は束。天才の束さんだよっ!!」

「束って……もしかして篠ノ之 束さん!？」

「おっ……しているのかい？君は……男の子？なのに。」

彼女の言葉が胸に痛い。しかし、彼女には恩があるのでなんでも無いように振る舞う。

「……はい。先日のことがあるまでISの訓練をうけていました。」

先日のこと、とはもちろん、ISは男性には動かせない、ということである。

「……ふーん。で、なんであそこで倒れていたんだい？」

彼は少しためらった後、全てを彼女に話した。家族だった人のこと、国に売られたこと、それから今にいたるまでの全てを。

彼女は始終黙ってきいていたが彼が話し終わると、唐突にきいてきた。

「君は、これからどうしたい？」

「どう、といわれても正直どうしたらいいのか……。」「

そう、どうしたらいいのかわからない。自分には帰る家もなければ、知り合いや親戚もない。

質問の意図がつかめなかった。乗りたいものにもI Sは男性では動かせないのだから。

そうおもいつつ、彼女の顔をみるとさっきまでとは違い、真剣な表情であった。

「……わかりません。でも訓練をうけていたこの数ヶ月は苦しかったけど、居場所があった……とおもうんです。誰かに必要とされる、ここにいてもいいんだ……っていう。でも、それももう無くなってしまった。」

そう言うと、彼はうつむいた。

三話（後書き）

時系列とか、こいつらなんさい？だとか、この歳でバイトだど！？とかツッコミたいところはあるとおもうが、……きにするな、軽く流してください。ああそういうもんか、と。

それか、こいつわかってねーなと笑ってください。だって国語3なんだちくせう。中傷や荒らしはやめてください。メンタル豆腐なんで。……つまりだな、楽しければそれでかまわん。

そうだろう？↑この話し楽しいか？↑え

四話（前書き）

短いですが…

四話

篠ノ之 束は考える。世界は何故、こんなにも残酷なのか、と。

自分の幼いころからの友人、親友といっても良い人は、親に捨てられた。異常な身体能力のせいである。束もまた、正確には違うが似たようなものである。その優秀過ぎる頭脳のせいだ。

故に束は、他人に興味がない。いや、世界にと置き換えてもいいかも知れない。そんな束が興味を向ける人物は、今まで三人しかいなかった。

一人は妹である篠ノ之 箒である。もうひとり、先ほども述べた、彼女の親友である、織斑 千冬である。彼女と束は幼稚園からの付き合いで、小中高とずっと同じクラスである。まあ実際は束がそうしむけていたのだが。最後の一人は、親友の弟である織斑 一夏だ。

そして今、ここに新たに一人加わることになる。名前はまだ、きいていないが、そんなことはどうでもいい。重要なのはそこではない。初めて彼（さっききいたときはビックリした。）を見たときは、まだ有象無象の一つ、その辺の石ころと変わらないぐらいの興味しかもっていなかった。しかし、彼の目をみたときに感じるものが、彼女にはあった。

それは、経験したものにはわからない。まるで世界に絶望していると言っているような、悲しい目。しかしまだ、助けてほしい！といっているようにも感じた。

彼女は悩んだが、とりあえず、連れて帰ることにした。取り敢えず、話をきいてみよう……と。

———さ……。ね……。ん。「東さん!!」

「……ん? どうしたんだい?」

「いえ、急に黙ってしまった。ので……。」

「ああ、大丈夫だよ。少し考え事してただけだから。」

「……あの、やはり迷惑でしょうか。それなら今直ぐにでも出ていきますが……。」

そういうと彼はまたうつむく。

話を聞く前までは、その選択肢もあったが、東は、話をきいた。きいてしまった。それならもう、そんなことは出来ない。

彼女は決めた。

そして取り敢えず「……もう少し、眠るといいよ。その話はまたあとでしょう。」そういった。

五話（前書き）

束のキャラが

五話

「……ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます。」

彼の言葉をきいて、束は部屋を後にすると、研究室に向かう。そしてコンソールをひらくと、指を滑らせる。さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出すと、膨大なデータに目配りをしていく。それと同時に進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを物凄い勢いで叩いている。その動きに連動して周りの機械も動きはじめた。束は作業を続ける。彼のDNAを解析、身長、体重などの身体的特徴、その全てを理解。そしてその値を入力したのち、数ヶ月前、束が逃亡生活に入る前に使用したプログラムを実行。

—————終了。

これで彼の人生は変わるだろう。だが彼女に後悔はなかった。その問いについては、既に答を得ている。

そして次に、彼のいた国にハッキングをかける。一応国家機密なので、それ相応の対策は施されてあるが、彼女の前には何の意味もなさない。

彼女は誰にも気付かれることなくその国のシステムを全て掌握する。直ぐに、求めていた情報がみつかる。

—————彼の情報。

彼の受けていた訓練から私生活に渡り、全てが記録されている。そしてそれをコピー、保存、削除を繰り返す。最後に彼の国籍。ディスプレイには（削除しますか？）とでている。束は其を数秒見つめた後――

――それに、ふれた。

彼女がその場を立ち去ったあと、彼は再び横になった。（一人でいると、また考えてしまうな……。）ここはどこだろうか。あの国の中なのか、はたまたどこか遠い、自分の知らない国なのか、自分にはわからない。

（そういえば、勝手に飛び出してきちゃったけど、研究所ではどうなっているかなあ……。）

自分を探しているだろうか。

（……いや、そんなはずはない。）そうだ、なぜなら自分は見た目はともかく、生物学上では、男である。ISには乗れない。そんな自分に利用価値はない。

（これからどうしよう……。）

ずっとここにいるわけにもいかないだろう。彼女にも迷惑がかかる。それに、たしか彼女は現在逃亡中だったはずだ。最悪、殺されるだ

ろう。よくて記憶を弄られるか。

（……そんなひとにはみえなかったけど。）

考えていると、段々瞼が重くなってきた……。

「……はあ、……とりあえず……眠ろう。」

そういうと彼は、微睡みのなかに落ちていった。

目をさますと、ベッドの横のテーブルに、パンと水が置いてあった。

（そういえば……おなかすいたな。）

いろいろあって忘れていたが、研究所を飛び出してからなにも口にしていなかった。雨水ぐらいである。あれからどれくらいたったかは分からないが、おそらくこれを置いてくれたであろう束に感謝しつつパンを口へと運ぶ。

食べ終わると、（とりあえず、束さんをさがそう。）彼は部屋をでた。

廊下と思わしきこの通路には、窓はない。人口的な光のみである。横にはいくつかの扉があるので、中央廊下であろうか。まあ、秘密基地なら地下だろう。と数ヶ月前にみたアニメの影響だろうか……変に納得しつつ彼は歩く。すると、プシューーと機械的な音を立てて横の扉がスライドする。

バスタオル姿の束さんが現れた。どうらやここはお風呂らしい。じゃなくて「な!?!? た、束さん!?!?」

「ん? やあやあ! 起きたみたいだねっ! ……どうしたの?」

「ふ、服を来てください!!」

「ははあ。ふっふっふ、おませさんだねっ! でも、君ぐらいの歳の子に見られても恥ずかしくないよっ! いっくんや箒ちゃんとおんなじぐらいだよね?」

同じくらいなものにも、いっくんや箒ちゃんが誰だかわからない。

「真っ赤になっちゃって……おませさんだねっ!!」

耐えられなくなって思わず回れ右。さっきまでいた部屋にダッシュした僕は、きつと悪くないはずだ。

まだ、顔が熱い気がする。よくよく考えてみると、遊ばれていたのかもしれない。あの人は油断ならない。

——コンコン、

(ビクッ!?)

はいるよーっといって束さんが部屋に入ってきた。

……良かった。服はきてる。相変わらず不思議の国のアリスだけど。

「うんうん！元氣そうでなによりだよ。それで、これからこと
なんだけど…、君の情報は全部けしちゃったよ。国籍も全部、ね。
あの国がいくら君を探しても君は存在しない。存在しないことにな
った。」

「……え？」

僕がとまどっていると、束さんはつづけて、

「だから……私の家族になりなよ。」

ニコニコという表現が一番似合うであろう表情でそういった。

いくところのない僕には、ありがたい話だけど……迷惑じゃな
いんだろうか。

「……いいんですか？」

「いいよいいよ！この天才束さんにおまかせあれ！安心しなよ、天
才束さんが、まもってあげるからさ。」

「……お願い……します。」

五話（後書き）

文体が安定しませんがきにしないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n51111/>

IS バカヤロウがかくちょーだぶん

2011年10月9日03時51分発行